

官能人肉食現代小説

魔界OL編



大黒達也

『魔界（OL編）』

作者 大黒 達也

一・あらすじ

若く美しい三人のOL達が、同僚の男に連れて行かれた村は、魔界への入り口であった。巧妙な手口によって、三人は欺かれ、暫しのバカンスを楽しむ。裏では、魔界の住人達が、彼女達を神々への生贄とするために、祭りの準備を入念に進めていた。

二．登場人物

加納 賢一 かのう けんいち

美女達を神々への生贄として、魔界へと誘う水先案内人。年齢二十六歳。端正な顔立ちに強靱な肉体を有する美丈夫。

葛西 京子 かさい きょうこ

年齢二十三歳。切れ長の二重瞼が美しく、抜群のプロポーションを持つ美女。魔界の住人達が、信奉する神々への生贄として魔界の村へと連れて行かれる。

もりた
森田 香織 かおり

年齢二十六歳。ハーフを思わせるような彫りの深い顔立ちをした美女。京子とともに生贄とされる。老人ホームや学校で陵辱の限りを受ける。

しらとり
白鳥 由香里 ゆかり

年齢二十四歳。売れっ子女優やモデルにもひけをとらぬような美人。村長宅に拉致監禁され、高校生の長男や女子大生の長女により、したい放題に陵辱される。

三・ 目次

第一章 策略

第二章 肉質検査

第三章 拉致

第四章 前夜祭

第五章 陵辱の嵐

第六章 生贄

第一章 策略

「ここで、二班に分かれます。観光コースとゴルフコースの方達はこのバスに残って下さい。温泉コースの方は名前を呼びますので、社用車に移っていただきます。それでは、森田香織さん、白鳥由香里さん、葛西京子さんの三人は社用車にどうぞお移り下さい」

社内旅行の幹事である加納亮太が、説明を行った。

「きれいどころが、皆、温泉コースか？」

頭部が剥げ掛かった部長の桜田が、不満そうな声を上げた。

「幹事。俺、温泉コースに移ってもいいかな？」

係長の森田が、社用車に乗り込んだ女子社員を窓

から食い入るように見詰めていた。

「残念ですが、それはできません。今回のコースは完全予約制で、変更はききません。多額のキャンセル料をご負担いただけるのでしたらけっこうですが……」

加納が、それだけ言ってバスを降りようとした。

「お前も温泉コースなのか？」

桜田が吐き捨てるように言った。

「これから先は、険しい山道になります。副幹事の中原は免許を取ったばかりなので荷が重過ぎます。

それに此処は私の地元なので」

それだけ言い残してバスを降りた。降りる寸前に加納はバスの運転手に目配せをした。運転手は無言

で大きく頷いた。ここまで社用車をひとりで運転してきた中原が、加納に代わってバスに乗り込んだ。加納にとって部長のご機嫌など、もうどうでも良かった。計画は既にスタートしており後戻りはできなかった。

「御免、待たせたね」

加納は、社用車に乗り込み、運転席のシートを大きく後ろにずらした。身長が百八十センチ以上ある加納は、バンタイプの社用車を狭く感じていた。

「大丈夫ですよ」

助手席には三人の中では最も若い葛西京子が乗っていた。今年で二十三歳になったばかりだ。加納は、ミニスカートからはみ出した京子の瑞々しい太

腿をちらりと盗み見た。加納は京子に対し、密かに恋心を抱いていた。切れ長の美しい二重瞼にほっそりとした鼻筋で、口元がセクシーであった。少し茶系に染めたセミロングの髪を自然な感じで肩まで垂らしていた。三人の中では最も控えめな性格だ。

バックミラーを覗くと、三人の中では最年長で、今年二十六歳になる香織の美貌が映し出された。ハーフを思わせる彫りの深い顔立ちをしていた。加納は冷たい感じのする香織の美貌があまり好きになれなかった。

もうひとりの由香里も社内きっての美人という評判どおり、整った顔立ちに豊満なボディを持っていた。

「香織さん。そこにあるクーラーボックスにジュースが入っているよ」

「本当？喉が渴いていたんだ。加納さんも飲む？」

「俺はいいよ。ビールが飲みたい気分なんだ」

「運転中じゃしようがないわね」

香織は、由香里と京子にジュースを手渡した。加納達四人が乗ったバンが、バスが進んで行った道とは、別の道を進み始めた。加納は幅員が四メートルほどの道を軽快に飛ばしていた。両側には奥深い原生林の森が広がっていた。

すぐに女達の会話が途絶えた。加納はにんまりとした笑みを浮かべて、路肩に車を止めた。彼女達が飲んだジュースには睡眠薬を仕込んでいた。

助手席の京子が可愛い寝息を立てていた。思わず唇に吸い付きそうになったが、睡眠薬が唾液に含まれているとやっかいなことになるので我慢した。

衣服の上から、形のいい乳房を揉んだ。あまりの柔らかさに溜息を漏らしていた。スカートを巻くりあげ、パンティの上に顔を押し付け匂いを嗅いだ。朝、シャワーでも浴びてきたのだろうか、ボディソープのいい匂いがした。興奮のあまり脳が張り裂けそうになっていた。パンティストッキングの上から、白い太腿を撫で回した。パンティの隙間に手を入れて、股間に指先を侵入させた。

柔らかい恥毛を搔き分け、膣口を探り当てた。指を入れ中をかき回したいという衝動に駆られたが、

何とか押さえ込んだ。表面に指先を這わせるだけに止めた。

腰の方から手を差し込んで、パンティの中に手を入れ、尻の膨らみを撫で回した。柔らかく滑らかな肌触りであった。尻の割れ目に指先を入れ、アヌスに少し侵入させてみた。抜いた指先に異臭はしなかった。たぶん、ウオシユレットを使っているんだろう。

加納は京子の着衣の乱れを直した。いずれ好きなだけ抱けるのだと考えていた。他の二人には手を出さなかった。狙いは京子だけであり、二人は村人に任せることに決めていた。加納は、ダツシユボードから携帯無線機を取り出した。

「メインディッシュは確保した。そっちの具合はどうだ？」

「今、底なし沼にバスを落としたところさ。ぶくぶく泡を出して沈んでいるところだ。飲み物に仕込んでおいた睡眠薬のおかげで皆楽に死ねる筈だ」

「了解。確実に沈んでから、村に戻るように」

「了解したぜ」

加納は携帯無線機をダッシュボードに戻してから、車をスタートさせた。樹海の中に作られた道を軽快に飛ばしていく。

二時間後、加納達を乗せたバンが、周囲を深い森に囲まれた集落に辿り着いた。

そこは村といったイメージは無かった。数百戸は

ある住宅すべてが建坪百坪以上、土地も千坪以上あり、近代的な造りをした豪邸ばかりだった。道幅も広く、よく手入れされた街路樹が植えられていた。その時、女達が目を覚ました。

「私達寝ちやったみたいね。加納さん。ひとりで退屈したでしょう」

京子が声をかけてきた。

「君達、仕事のし過ぎで疲れているんだね。ここでゆっくり休むといいよ」

加納は優しい声で答えた。加納達を乗せたバンは、集落の中心に位置するホテルの駐車場に滑り込んだ。加納が三人を連れて一階ロビーに行き、チェックインの手続きを行った。

「へえ。けっこうりっぱね」

香織が、最上階の十階まで造られた吹き抜けを見上げた。

「こんな田舎にしては、中々のものだろうか？」

「田舎って感じはしないわ。軽井沢に来たみたい」

「そう言ってくれれば、すっごく嬉しいよ」

香織は回転式ドアの向こう側に見える白樺並木を眺めていた。

「加納さんのお父様が経営しているんでしょう？」

京子が話題に参加してきた。

「加納ちゃんと結婚したら、高級旅館の若女将になれるんだ」

由香里が潤んだ目で加納を見詰めてきた。

「こんなところで立ち話を何何で、部屋に案内するよ」

加納は、女達を部屋に案内した。和室と洋間がセツトになった部屋だ。ベランダには露天風呂が造られ、いつでも湯に浸かることができた。

「宴会までの時間は、自由時間だ。一階の大浴場やプールが利用できるよ。屋外を散策するのもいいと思う」

「宴会やるの？」

「スケベ親父達のセクハラにはうんざりよ。あら、加納ちゃんは関係ないわよ」

女達は一様に不満げな顔をした。若い女達にとって、酔い潰れた中年男達の世話をすることほど嫌な

ことは無かった。

「あら、ここ携帯使えないんだ」

香織が京子に聞いた。

「本当ね。私のも駄目みたい」

「ここは圏外なんだ。生憎、この村の交換機も故障中でね。部屋の電話も使えないんだよ。急用があるの？」

「用事なんて無いわよ。友達に連絡しようと思っただけ」

加納は女達がひとり住まいであることを思い出していた。

女達は三人で一階にある大浴場に向かった。三人とも浴衣に着替えていた。

「最高ね。誰もいないじゃない！」

「私達だけみたいね」

湯煙がのぼる大浴場には、京子達の三人しかいなかった。女達は何種類もある浴槽を梯子して楽しんだ。

加納はホテルの管理室で、彼女達が入浴している様子を隠しカメラで見っていた。その映像は、村の各家庭にも送られている筈であった。

「加納さん。今回は極上ですね」

ホテルの警備員が股間を押さえながら加納に話し掛けた。

「ああ。これまでに最高の獲物さ」

加納は満足げに頷き、モニターに映し出される女

達の裸身に見入っていた。特に京子の裸身を食い入るように見ていた。手足が長く、すらりとしているが、乳房や尻は豊かに盛り上がっていた。

第二章 肉質検査

女達が湯からあがり、部屋で寛いでいるところに加納がやって来た。

「悪い知らせがある」

「何ですか？」

京子が、加納に座布団を差し出した。

「残りの連中が来れなくなった」

加納は座布団に座り、深刻な表情を見せた。

「どうしてですか？」

京子が加納にお茶を入れながら尋ねた。

「バスから無線で連絡があつたんだ。こちらに来る途中にある橋が壊れてね。直すのに一週間はかかるみたいだ」

「一週間！それまで帰れないの？」

それまで黙って聞いていた香織が叫ぶように言
った。

「へりを手配することはできるが、有料になる。か
なり高いということだ」

「それって会社が負担してくれないの？」

由香里が加納の顔を覗き込むようにして言っ
てきた。

「まず、無理だね。部長は君達の休暇を認めていたよ」

女達は、一様に不安そうな表情を浮かべていた。

「大丈夫さ。何も心配することは無い。一週間のバカンスだと思えばいいさ」

「着替え一週間分も用意していないわ」

「一階ロビーに衣料売り場があるよ」

「そんなに現金持ってきていないわ。ここに銀行なんかないわよね」

「一階ロビーにキャッシュディスプレイがあるから、それを使えばいい。そうだ、そろそろ夕飯の時間だね」

加納が言い終わらぬうちに、仲居が夕飯の膳を運

んで来た。テーブルの上にはウニやアワビ等の刺身の盛り合わせや、フグ鍋が並べられた。毛蟹や花咲カニが、数匹丸ごと皿に盛られていた。その他にはメロンやブドウ等のフルーツの盛り合わせが所狭しと並んでいた。

「加納ちゃん。豪勢じゃない！」

由香里が目を輝かせた。

「全社員分の宿泊費を君達三人で使うんだ。あたりまえさ」

「ちょっと、フルーツが多すぎない。これじゃ食べきれないわよ」

香織がいうように、メインディッシュの魚介類や肉類よりも、量は遥かに多かった。不自然なくらい

だ。

「この辺りの特産品なんだ。味は保証するよ。それにフルーツは肌の艶を良くするんだ」

「加納さんは食べないんですか？」

京子が言うように、テーブルには三人分しか用意されていなかった。

「ちよっと、これから用事があるんでね」

「地元だもんね。彼女にでも会いに行くの？」

香織が京子の顔をちらりと見ながら言った。

「ここに彼女なんかいやしないさ。青年会の集まりがあるんだよ。明日から祭りが始まるんだ」

「祭り？」

「出店や花火もやるよ。君達もきつと楽しめる筈

だ」

加納が部屋を去ってから、女達だけによる宴会が始まった。京子以外は酒好きで次々にビールが入ったコップを空けていった。最年少の京子も酒を付き合わされた。料理の味も最高であり、高級料亭の味にもひけをとらなかった。宴会は深夜にまで及んだ。そろそろお開きというところで、加納が戻って来た。

「けっこう飲んだんだね」

加納が言うように女達は泥酔の一步手前まで飲

んでいた。

「悪い？」

香織は相当酔っているらしく加納に管を巻いて

きた。京子はテーブルに顔を伏せて可愛い寝息を立

てていた。

「とんでもございませんよ」

加納がおどけた調子で言った。

「こんないい女を三人もほったらかしにして、どこに行っていたのよ？」

由香里がオチヨコとトツクリを持ち、加納にじり寄って来た。

「はいはい」

「はいはい、じゃないでしょう。あんた幹事じゃない。何か見せてよ！」

香織が食い下がった。

「そうだ。加納ちゃんのストリップが見たいな」

由香里が加納の膝に手を当てながら言った。

「いいアイデア！京子も起こしてやらないと可愛
そうよ」

香織も加納の隣に移動してきた。

「せっかく気持ちよさそうに寝ているんだから可

愛そうだよ」

加納が京子の寝顔を見詰めながら言った。

「京子のことはいいよ。それより早く脱いで。全部
よ」

由香里が加納の肩に豊満な胸を押し付けて来た。

「わかったよ。今夜は特別サービスだ」

立ち上がって、Tシャツを一気に脱いだ。下着は
付けていなかった。鍛え抜かれた筋肉が生きづいて
いた。しかし、ボディビルで鍛えた筋肉とは違いシ

ヤープな感じだ。少しも無駄な贅肉は付いていなかった。それを見て女達が目を輝かせた。

「ズボンも脱ぎなさい！」

言われたとおりにズボンを脱ぎ、パンツだけになった。股間の盛り上がりには女達の視線が集中した。ふたりとも生唾を飲み込んだ。由香里が加納の前にじり寄って、股間に顔を近付けた。手を差し伸ばしパンツを引き降ろした。黒々としていきり立った巨根が女達の視線を貫いた。由香里がパクリといった感じで頬張った。

「由香里。ひとりだけズルイよ！」

香織も近付いてきて、加納の硬く引き締まった尻を舐め回した。

加納は女達によって、床に横たえられ、手や口を
使いしたい放題に騷りぬかれた。女達は交互に、騎
上位になり加納を犯し続けた。明け方近くになり加
納はやっと開放された。

「会社の皆には内緒よ」

香織が耳打ちするように言ってきた。女達は酔い
が覚めたらしく、いつもの表情に戻っていた。京子
はテーブルの横で、座布団を枕にして本格的に寝込
んでいた。三人は部屋のバスルームで汗を流した。

「喉が渴いちゃった。何か無いの？」

シャワーの後で、由香里が加納に聞いてきた。

「ちょっと待ってて」

加納は部屋に備え付けの冷蔵庫から、ウーロン茶

のペットボトルを2本持ち出して女達に勧めた。ウーロン茶を飲み始めて、少しすると香織が大きな欠伸をした。由香里も同じだった。

「何か、凄く眠くなってきたわ」

「もう夜明けが近いんだ。当たり前だよ。少しでも寝た方がいい」

二人の女達は、ふらつくように和室に隣接するベツドルームに入り、倒れこむようにしてベツドに横たわった。すぐに安らかな寝息が聞こえてきた。

加納はズボンのポケットから小さな薬ビンを取り出した。中に入っていた透明な薬品をハンカチに染み込ませ、それを近くで寝ていた京子の鼻に押し当てた。京子の寝息がいつそう深いものになった。

そのとき、部屋のドアが開けられ、男達がタンカを運び入れてきた。

「色男はいいよな。こんな美人を好きにできるんだから」

「それでもないさ。そんなことより早く運び出せ。そろそろ村長との約束の時間だ」

ホテル二階のパーティ会場には、テーブルが三卓並べられ、全裸に剥かれた京子達三人が横たわっていた。三人ともウーロン茶やハンカチに沁み込ませた睡眠薬により、深い眠りに落ちていた。

テーブルの近くには、加納と、頭部が禿げ上がり、でっぷりと太った中年男が向かい合うようにして椅子に座っていた。

「今回の供物は極上品だな。でかしたぞ、加納」

「村長のご支援があったからです」

加納は、村長の海藤に深く頭を下げた。

部屋には彼らの他に、十数名の若い男達が、椅子に腰掛けていた。

「何か望みでもあるか？」

村長の海藤が満面に笑みを浮かべながら尋ねてきた。

「奉納の日まで、京子を独占させて下さい」

「ふーむ……」

海藤は少しの間、目を閉じていた。

「いいだろう。最高級の美女を三人も用意してくれ
たんだからな」

それを聞いて、加納は立ち上がり京子を抱き上げて部屋を出て行った。

「いいんですか？村長」

部屋の隅で見ていた男達のひとりが、海藤に声をかけた。

「何がだ？」

「加納に女を独占させて」

「まだ、二人もいるじゃないか。それに加納は奉納の日までといった。直前に腰が抜けるほど抱けばいい」

海藤立ち上がり、香織が寝ているテーブルに近付いた。他の男達もテーブルを取り囲んだ。海藤が乳房を驚掴みにして、柔らかく揉み始めた。

「こいつは素晴らしいぞ。手の平に吸い付く感じだ」

海藤が大きな溜息を漏らした。

「太腿の肉も柔らかいです。こいつは最高の食材だ！」

二十代前半に見える男が、叫ぶようにいった。

「よし、今度はケツだ」

海藤が言うと、何本もの手が伸びて、香織をうつ伏せにした。

「素晴らしい！染みひとつないじゃないか。それにこの手触りは何だ。すべすべで、絹のように滑らかだ。肉付きもいい。十分な肉が取れるぞ」

さらに海藤は、両手で香織の尻を割り、顔を近付

けた。

「肛門もきれいな色をしておる。排泄以外使っていないようだ」

海藤の一指し指が、香織のアヌスに差し込まれた。

「おお……。締め付けるぞ！よし、今度はオマ＊コだ」

海藤は、再び仰向けに横たえられた香織の長く形のいい両足を大きく持ち上げた。

「美味しそうなアワビじゃないか！」

海藤が唸るように言った。

「蒸したらいいんじゃないですか？」

「生でも美味そうだ」

海藤は香織のアヌスに人差し指を根元まで挿入

し、さらに膣に口を付けて、ガツガツといった感じで舐った。近くで見ていた男が、香織の寝ても崩れない豊満な乳房を舐め回した。十分に膣が潤み切ったところ、海藤は黒々とした男根を膣に突き込んだ。

「最高に締りがいいぞ」

上擦った声を上げながら、腰を前後左右に振った。海藤が中に放った後、休む間もなく次の男が男根を挿入し、腰を振りたくった。

隣のテーブルでは、うつ伏せに横たわっていた由香里の盛り上がった白い尻に男が、顔を押し付けていた。その後、由香里も男に背後から貫かれた。

男達は入れ替わり立ち代わり、意識の無い二人を犯し続けた。意識が覚めかかると、タオルに染み込

ませた麻醉薬を嗅がせた。

一方、加納は京子をホテル内にある自室に運び込んでいた。二十畳ほどのダイニングキッチンに十畳ほどのベッドルームが付いていた。

加納は京子をダブルベッドに横たえ、自らも全裸になり、添い寝をするように横たわった。意識が無い京子の口に吸い付き、舌を吸い出して存分に吸った。

蜜の様な味がした。形の良い乳房に吸い付き音を立てて吸いまくった。

加納の口は徐々に下方へと移っていった。美味しそうな性器は後回しにして、染み一つ無い太腿を舐めた。脹脛も舐め、足の指も丹念に舐めた。

股間に顔を埋め、膣の匂いを嗅いだ。ボディソープに交じって、淫靡なメスの匂いを感じた。夢にまで見た女の匂いに脳が張り裂けそうだった。膣に口をつけて、激しい勢いで吸いまくった。クリトリスを舌先で舐めた。いくら舐めても厭きることには無かった。

裏返しにして、染み一つ無く、すべすべで盛り上がった白い尻の合間に顔を埋めた。いつまでもそうしていたかった。アヌスの匂いを嗅ぎ、気が済むまで舐めた。

男根が限界までに怒張していた。これ以上我慢することなどできなかった。京子を仰向けにして、両足を持ち上げ股間を割った。加納の唾液で潤み切っ

た膣に男根をズブリといった感じで挿入した。京子の膣口は狭く、凄まじいまでの締め付けに、加納は思わず喘ぎ声を上げていた。

数時間後、ホテルの一室では、香織と由香里に京子の三人が、それぞれビニールマットを敷いた簡易テーブルに横たえられていた。三人とも麻酔が効いているのか意識は無かった。彼女達の周りでは、水着姿の若い女達が立ち働いていた。

香織達の膣に吸引機へと繋がれたホースを入れ、男達が放った精液を吸いだしていた。その後で、全身くまなくボディソープとシャワーで洗い清めた。香織達三人が目覚めたのは、午後一時過ぎだった。

「随分寝ていたみたいね」

京子がベッドから起き上がり、軽く伸びをした。

「完全に熟睡していたわ」

続いて香織がベッドから降りた。

「私、すつごくエツチな夢見ていたみたい」

最後に由香里がベッドから降りて大きな伸びを

した。三人が洗面を終え、化粧をしているときに、

ドアをノックする音が聞こえてきた。

「どうぞ。開いていますよ」

京子がノックに答えると、ドアが開き、黒色のT
シャツにジーンズを穿いた加納が立っていた。

「おはようじゃなく。こんにちはかな。皆、お腹空
いただろう？昼飯の用意ができているよ」

加納は女達を二階のレストランに案内した。彼女

達は浴衣から私服に着替えていた。昼食はバイキングだった。加納も彼女達に付き合い席に付いた。皆、会話を楽しみながら、箸を動かした。加納は正面に座った京子に、いつしか熱い視線を送っていた。気が付いた京子がどうしたのという感じで、視線を合わせてきた。

加納は食事があまり喉を通らなかった。少し前まで、意識の無い京子の裸身を弄んでいたのだ。

「さつきから、どうしたの？」

加納の隣に座っていた由香里が聞いてきた。

「何が？」

「何って。京子のことばかり見ているじゃない」

由香里がからかうように言った。

「京子ちゃんが、綺麗過ぎるからだよ」

京子の方を見ながら答えた。

「そんなこと言われたって、何も出ませんよ」

「そう言いながらも京子の頬は、少し赤くなっていた。
た。」

「朝からお熱いわね。ところで、今日はどうい
うス
ケジュールになっているの？」

香織が会話に割り込んできた。

「この辺一帯の散策はどう？滝とかきれいな川を
見るのは気が休まるよ」

「露天風呂もあるの？」

「もちろん。川が天然の温泉になっているんだ。そ
うそう、青年会のメンバーが案内してくれるよ」

「青年会？」

「二十代から三十代前半で、気のいい奴ばかりだ。

男前もいるよ」

「ハンサムボーイ大好き！」

由香里がおどけた調子で言った。

「決まりのようね」

「夜は、祭りの前夜祭があるんだ。打ち上げ花火も

あつて、最高にロマンチックだよ」

第三章 拉致

へと続く。